

沈黙する老人——『骨董屋』におけるトレント老人の暴力

杉田 貴瑞

1. はじめに

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の初期作品『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*, 1840-41) は、当初彼が編集していた週刊誌『ハンフリー親方の時計』(*Master Humphrey's Clock*, 1840-41) に掌編として掲載される予定であった。しかしながら、雑誌の売り上げという商業的側面と、この作品をさらに大きなものになりたいという作者の欲望が、『骨董屋』を長編小説へと変貌させた¹。そのため、ロンドンの片隅にある骨董店でひっそりと暮らすヒロインの少女ネル (Nell) とその保護者であるトレント老人 (the old Trent) の対比を、語り手ハンフリー親方 (Master Humphrey) が描くという当初の設定は変更を余儀なくされ、二人でロンドンを脱出してイングランドを放浪する物語へと変容していく。それに伴って、クイルプ (Quilp) やディック・スウィヴェラー (Dick Swiveller)、さらにはパンチ芸人のコドリンとショート (Codlin and Short) などの騒がしい作中人物が次々に登場することになり、静かな夜のロンドンで幕を開けたはずの作品には、騒々しい場面も増えていく。このような事情から、マルコム・アンドルーズ (Malcolm Andrews) はネルたちの旅路を“retreat from society” (73) と表現したが、これはまさに騒がしい街中から静かな田舎へという図式に当てはまる²。そのため、作品解釈において多くの注目を集めてきたのは、穏やかなヒロインのネルとやかましい悪役クイルプである。エドガー・ジョンソン (Edgar Johnson) も指摘したように、しばしば“fable”と評されるこの作品にあって (325)、言わば善悪の両極とも言うべきこの二人の存在に着目するのは当然の姿勢であるかもしれない³。ロンドンの骨董店から祖父と共に逃げ出して、幼いながらに逃避行を続けつつも、次第に死へと追い詰められていく天使のような少女ネルと、そのネル

を付け狙う醜い小人の悪漢クイルプという明確に二分された善悪の勢力図は、たしかに作品を解釈する上で分かりやすい構図である。

しかし果たして、ネルを追い詰める者は、本当にクイルプであろうか。ロンドンを飛び出した後、ネルとクイルプが実際に接近するのは、ただの一度だけである。それもクイルプの側はネルに気づくことなく、いわばすれ違いのうちに終わる。このときネルはたしかにクイルプに怯えてすぐに逃げ出そうとするのだが、それ以外に二人が直接顔を合わせる場面はなく、作品の後半におけるネルたちの旅に、クイルプの影が差すことはほとんどない。つまり、作品世界を捉える概念として、たしかにネルとクイルプに善悪の対比を見ることは可能だが、そのように単純な観念上の対立構造を見出すだけでは捉えきれない部分がこの作品にはあるということだ。

むしろネルが真に恐れていたのは、トレント老人であるとの指摘もある。フィリップ・ホブズボーム (Philip Hobsbaum) は “Nell is not Quilp’s victim but her grandfather’s; Quilp can’t even find out where she is” (58) と述べて、一緒に旅をするトレント老人こそがネルを死に追い詰めた張本人であると主張する。ネルを豊かにするという目的のためにわずかな資産のすべてを賭博につき込み、その挙句にクイルプへの借金で破産した祖父は、たしかに経済的にネルを追い詰めている。このようなトレント老人の賭博癖に注目してギャレス・コーデリー (Gareth Cordery) は、19世紀という時代の賭博熱との関連を指摘した上で、ディケンズが拝金主義に走るヴィクトリア朝社会を批判していると主張する (43)。ディケンズがヴィクトリア朝社会と密接な関係を持つ作家である点を踏まえれば、そのような時代背景は考慮すべき問題かもしれない。しかし同時に、トレント老人という作中人物の言葉には、そのような社会的状況に影響されただけではない、本人が抱える個別の精神的な問題も内在しているように思われる。このトレント老人の心理がどのように表現されているかを追究することで、これまでの研究とは異なった方向からのアプローチを試みたい。

本論では、次のような順序でトレント老人の人物造形を明らかにしていく。まず、トレント老人とクイルプの人物造形を、彼らの発する言葉に注目して

比較する。その上で、物語後半沈黙していくトレント老人の姿を、特にネルとの関係から考察する。そうすることで、善悪や生死といった以前から指摘されてきた観念的な対立構造だけでなく、そのような対立構造に収まらない作中人物の内面をどのように描写するかという作者による表現上の問題が新たな視点として浮かび上がってくるはずだ。

2. トレント老人の言葉とその暴力性

これまでトレント老人に多くの注目が集まらなかった理由としては、トレント老人が全編を通じて、強い口調で言葉を発する機会が少ないというのが、一つ挙げられる。しかし、トレント老人が発する数少ない言葉の裡には、初めからどこか異常な響きを感じられる。たとえば、第1章でハンフリー親方が夜のロンドンで独り迷子になっていたネルを骨董店まで送り届ける場面がある。ハンフリー親方はもう少し孫娘を気遣うようにと諭すのだが、トレント老人は次のように反論する。

“I don’t consider!” he cried with sudden querulousness, “why, God knows that this one child is the thought and object of my life, and yet he never prospers me – no, never.” (14)

すでに年老いて痩せた老人が猛烈な勢いで反論するこの場面は、単なる一時の激情に駆られた怒りと解釈するには、あまりにも不穏な様子で描かれていると言わざるを得ない。しかも、トレント老人はその後も執拗にハンフリー親方に向かって、自分がいかにネルを愛しているか、を説明する。言葉をぶつけられた側のハンフリー親方にしても、何とか自らの真意を伝えようとするものの、あまりの剣幕にただ驚いてたじろぎ、何とか老人に平静を取り戻してもらおうべく、相手をなだめるしかない。ネルに至っては、ただ老人の首にすがりつき、必死になって落ち着かせようとするだけである。このときトレント老人は、ネルを危険な目に遭わせないように気遣うべきだと諭した相手の言葉に、どれほどネルを愛しているかを訴えて、自身の愛情の問題にす

り替えてしまっているのだ。このすり替えには、ネルを深く愛していれば彼女に何をさせても構わないという利己的な響きが込められている⁴。それどころか、事実トレント老人は、夕暮れ時のロンドンネル独りで歩かせた上に、真夜中に彼女を家において賭博場に通うということまでしている。ネルへの愛情を、言葉を尽くして弁明すればするほどに、トレント老人の発話は、空回りして、真意が伝わらなくなっていく。この辺りにトレント老人の抱える問題が潜んでいるように思われる。

ここで、トレント老人と並んでネルを追い詰めた人物として、しばしば挙げられるクイルプに眼を向けてみたい。クイルプと言えば、ディケンズの悪役のなかでも、特に戯画化された人物として有名である。その外見はしばしば犬や猿などと表現されるばかりでなく、ダニエル・クイルプという固有名を使わずに、“the dwarf”という一般名詞を呼称に用いられることも多い。また凶暴なクイルプは、普段から妻であるクイルプ夫人や召使の少年に暴力を働いては楽しむという、サディスティックな性格も与えられている。そんなクイルプは、口から飛び出す言葉にしても乱暴で他人を傷つける性質のものがほとんどである。それは、ネルとクイルプが直接会話する場面においても同様である。ネルとトレント老人がロンドンから逃げる前の第6章においてネルと会話する場面にその特徴が表れている。

‘To be Mrs Quilp the second, when Mrs Quilp the first dead, sweet Nell,’ said Quilp, wrinkling up his eyes and luring her towards him with his bent-forefinger, ‘to be my wife, my little cherry-cheeked, red lipped wife. Say that Mrs Quilp lives five years, or only four, you’ll be just the proper age for me. Ha, ha! Be a good girl, and see if one of these days you don’t come to be Mrs Quilp of Tower Hill.’
(53)

ある意味でこれはプロポーズの言葉のはずだが、この台詞からそのような意味合いはまったく伝わってこない。では、相手の気持ちなどお構いなしに愛の告白を行っているかといえ、それも違う。それどころか、“Mrs Quilp

the second” などという冗談めいた呼称が示すように、これでは本当にネルへの求愛の言葉であるのかさえ疑ってしまう。むしろ、直後にネルがおびえていることから明らかなように、クイルプの主眼は相手を脅しつけて怖がらせるという子供じみた欲求を満たす一点に絞られている。クイルプが他人を恫喝するのは、他にも第21章でナブルズ家の赤ん坊を泣かせる場面などいくつも描かれるが、いずれの場面も赤ん坊やネルといった純真無垢な存在を、相手のことなどお構いなしに、口を突いて出る饒舌でやかましい言葉を使って脅しつけている。そのような場面を幾度も差し挟むことで、クイルプが作中で、純粹に嫌悪感を抱かせる存在としての、実に分かりやすい役割を担わされていると分かる。

だが、このクイルプの姿に、読者が心底震え上がることはないはずである。なぜならここに描かれるクイルプは、まさにパンチ劇に登場する人形そのものであり、言葉の内容そのものは空虚であるからだ。ポール・シュリッケ (Paul Schlike) らが指摘するように、『骨董屋』は「見世物」“freak”の要素がふんだんに取り入れられた作品であり (*Dickens and Popular Entertainment*, 87-88)、登場人物のほとんどがクイルプと同様、人形のようにただひたすら劇中での決められた役割を果たす存在である⁵。それゆえ、人形のような彼らの台詞は、言葉それ自体の意味よりも、発話者の身振りや口調に重点が置かれる。だからこそクイルプの求婚の言葉に、ネルへの愛情や、ひいては求婚の意思自体が込められていなくても大きな問題はない。作者の狙いは、クイルプとネルの対比を最大限に引き出すことにあり、それは、数少ないネルとクイルプ二人が会話を交わす場面でこそ表現される。言い換えれば、クイルプは自身の性格を最大限読者に伝えるために言葉を紡ぎ出している。

クイルプに較べて、トレント老人の言葉は複雑な様相を呈している。トレント老人はネルに頼りきった自主性のない人物としてほとんど話す機会もなく、逃避行を続けていく。ところが、そんなトレント老人が大きくクローズアップされるのが賭博癖をあらわにしたときである。そのようなときには普段寡黙なはずのトレント老人がせきを切ったように、狂おしいまでの感情をあらわにする。ネルのためと称して賭博に有り金をつぎ込むトレント老人は、

賭博への衝動が高まると善悪の判断もままならなくなり、とうとう盗みまでしてその金を手に入れようとするのだが、それを必死に止めるネルに向かって次のように言い放つ。

‘Get me money,’ he said wildly, as they parted for the night. ‘I must have money, Nell. It shall be paid thee back with gallant interest one day, but all the money that comes unto thy hands, must be mine – not for myself, but to use for thee. Remember, Nell, to use for thee!’ (245)

トレント老人は感情が昂ぶったときにしばしばネルを見下して“thee”あるいは“thy”という人称代名詞で呼ぶが、ここもその一例である。その感情の昂ぶりに加えて、あれだけネルのことをかわいがるトレント老人がこのように脅迫めいた言葉を口にするのだ。当然ネルの心には困惑や驚き、恐れなどの感情が渦巻き、このようなトレント老人の感情の昂ぶりが一刻も早く静まってほしいと願うのだが、最も強調されるのは、悲哀の感情だ。クイルプにプロポーズされたときとは異なり、この引用の直後にはネルの深い悲しみが描かれている。このようなトレント老人の姿を、精神分析の観点から考察したりサ・ハートセル・ジャクソン (Lisa Hartsell Jackson) は、“grandfather’s figurative rape of his granddaughter” (53-54) とまで言い切っているが、それというのも、トレント老人の「お前のためなんだ」という一言が重くのしかかるからだろう。「お前のためなんだ」という言葉に一切の嘘はない。トレント老人はネルのためだと言いながら賭博を続けるが、実際にはネルをどんどん窮地に追いやるだけになってしまう。ネルの「乞食になって幸せになりましょう “Let us be beggars, and be happy” (79)」という言葉は一見楽天的に映るが、少女のネルにしてみれば乞食になるという選択肢はそもそもかなりの危険を伴う。それでも、このように極端な言葉を口にするということは、トレント老人に賭博を止めさせるためにはたとえ乞食になるという危険を冒しても、金銭の影が及ばないところへ彼を導くという決意に他ならず、ネルの側に強い精神的な負担が掛かっていることの証左でもある。つまり、トレン

トレント老人がネルのことを思えば思うほど、ネルは精神的に追い詰められていく。

トレント老人は、ロンドンの骨董屋にいるときから終始一貫して、ネルのためを思っている。物語序盤、骨董屋にいたときにも、クイルプに向かって次のように述べる。

“I am no gambler,” cried the old man fiercely. “I call Heaven to witness that I never played for gain of mine, or love of play; that at every piece I staked, I whispered to myself that orphan’s name and called on Heaven to bless the venture, which it never did. (82)

トレント老人は、自身を賭博師ではないと言い、自分のために賭博をやったこともないと言う。その言葉には、先ほどの引用と同じく一切の嘘はない。言葉の額面通り、ネルを愛しているという一点にすべての感情が集約されている。しかしその強すぎる感情のために却って、言葉をおつけられた相手は、単に恐れるだけでなく、戸惑いや悲しみの感情を催さずにはいられない。

トレント老人の言葉に裏表がないという点においては、クイルプの暴力的な言葉との間に差異はないかもしれない。しかし、両者の言葉に込められた感情の違いは明確であろう。クイルプが単に相手を恐れさせるだけの、騒がしい暴力の台詞を発していたのと比較すれば、トレント老人の言葉には、言わば静かな暴力性が込められている⁶。

なぜトレント老人の言葉には、そのような暴力性が内包されているのか。言い換えれば、クイルプとの相違はどこにあるのか。それは、本人の自覚という点にあるだろう。クイルプが相手を脅すのは、本質的に自身の欲求を満たすためである。したがってその言葉も、その欲求の域を出ない。しかし、トレント老人は本人が制御できない感情を表現してしまっている。賭けをするときに「神の御加護にすがる」との言葉には、大げさな表現であるだけでなく、その裏には文字通り賭博にまで手を染めても「神が報いてくれない」という好転しない人生への不満も込められているはずだ⁷。ところが、当の本人はネルのために賭博を成功させるという一点に集中しており、過去の失

敗には見向きもしない。賭博の失敗という事実には気づきながらも、それについての内省が描かれず、まるで他人事のように映ってしまう。そのために、言葉の外側と内容が一致せず、受け取る側の人間を戸惑わせてしまう。トレント老人がいかにネルのためを考えたところで、それは周囲の人物にとって、あるいはネルその人にとっても、決してネルのためとは思われない。この意識がトレント老人には欠落している。そして欠落した部分を埋めるだけの思考力も認識力も持ち合わせていないトレント老人は、ただネルへの愛情を押し付けているとしか思われない言葉を発し続けるほかない。それは愛情の暴力とでも呼ぶべき力で、ネルを圧迫し続ける。トレント老人の裡には、このような暴力性が隠されており、それはほとんど表面に現れてこないものの、わずかに発する言葉のなかにうごめいている。

3. トレント老人の沈黙

トレント老人の言葉の暴力性は、掌編としてディケンズがこの作品を計画していたときからのモチーフ、つまり少女ネルとそれを取り囲む古い骨董品たちとの対比に関係している。語り手のハンフリー親方は初めて骨董店を訪ねたときに、店内が単に古びた品物が並べられているというばかりでなく、陰気で、外の世界から取り残されてしまったかのような印象を受けたと述懐する。本来売り物であるはずの骨董品を「大衆の眼から隠して“hide their musty treasures from the public eye in jealousy and distrust” (13)」いる老人の姿勢は、どうあっても外の世界と関わりたくないという断固とした意志の表れとして読み取れる。たしかにトレント老人は、夜のロンドンで迷子になったネルを親切に送り届けてくれたハンフリー親方にもいささか冷淡で、まるで不意に侵入してきた厄介者のように彼をあしらう。他人を一切締め出して、ネルと二人きりの世界に閉じこもろうとする閉鎖的なトレント老人の心理が、骨董店全体に反映しており、トレント老人の暴力性を象徴的に物語っている。

ネルと二人だけの内なる世界に閉じこもろうとするトレント老人の姿勢は、ロンドンを飛び出してからの沈黙によって一層際立ってくる。トレント老人は、骨董屋にいる間こそ、ネルの将来のためと称して賭博に走り、その金を

クイルブから借りて調達するなど、動き回る姿が描かれるが、とうとう借金を返せなくなり、店をクイルブに差し押さえられると、重い病気に罹ってしまう。その後ネルの看病もあって回復するものの、病気をする前と較べてもさらに別人のように無気力な人間となってしまう。ネルと共に逃避行を始める第12章以降は、口数も少なく、その場に居合わせているのかさえ疑問に思ってしまう場面もあるほど、影が薄く自主性のない人物として描かれる。だが、作者はそのような病身のトレント老人についても、その異様な心理を描いている。たとえば第15章において、旅の途中で初めて出会った人に道を尋ねる場面でも、トレント老人はネルにすべてを任せきりにしている。

‘God save you, master,’ said the old cottager in a thin piping voice; ‘are you travelling far?’

‘Yes, sir, a long way,’ replied the child; for her grandfather appealed to her.

‘From London?’ inquired the old man.

The child said yes. (126)

代わりに返事をしてほしいというトレント老人の要求に、ネルはすんなり応じている。それどころか、話し相手までもがトレント老人ではなく、ネルの方に話しかけるようになっていく。そのため、子供らしからぬネルの落ち着きが強調されて、代わりに、まるで袖にすがるかのような力のないトレント老人の情けなさが増すことになる。このようにネルが旅の主導権を握っている場面はその後も繰り返し登場する。第17章において宿屋に泊った場面では、自分のことなど構わずに老人の世話をするネルの姿が描かれており、第27章においては、蠟人形屋の女主人であるジャーリー夫人 (Mrs Jarley) と初めて会話するときに、トレント老人が疲労のために眠り込んでしまっており、ネルは独りで旅のいきさつを語っている。小さなネルにすべてを任せきりにするトレント老人の姿は、病身であることを考慮しても、あまりに無責任な態度であると言わざるをえない。その上ネル以外の誰とも会話しようとならないがために、ますます二人だけの世界に閉じこもろうとする姿勢が鮮明

になる。プロットを追う毎に口数を減らしていき寡黙になるトレント老人は、その沈黙においても、一層ネルを苦しめる。

それでもネルは自分の祖父を甲斐甲斐しく守ろうとする。だが、意外なことに、ネルがトレント老人の愛情に何らかの言葉を返すのは、作品全体を通してごくわずかしかない。ほとんどの場面において、ネルは表情やしぐさで自分の感情を最小限に表現するだけだ。トレント老人に愛情の言葉を掛けられても、ネルはそれに対してイエスともノーとも答えない。ただ沈黙を守るのみである。

そんなネルがトレント老人への思いを言葉にするのは、二人の直接のやり取りのなかではなく、第三者との会話においてである。その代表的な例が、ネルを雇ってくれるというジャーリー夫人の申し出を受けるときだ。

‘But he never will be,’ said the child in an earnest whisper. ‘I fear he never will be again. Pray do not speak harshly to him. We are very thankful to you,’ she added aloud; ‘but neither of us could part from the other if all the wealth of the world were halved between us.’ (210)

普段物静かなネルにしては珍しいことだが、「大声で」二人は絶対に離れることはないと断言する。ここには、トレント老人が施設送りにならないように気遣う、若いネルなりの考えがある。しかし、そんな努力より明らかに眼を引くのは、黙って横暴なトレント老人に付き合う可哀そうな孫娘の姿であるはずだ。ネルは、トレント老人が賭博に走り、盗みを犯そうとしても、それを防ぐことはできない。ただじっと耐えることでその場を何とかやり過ごそうとするだけである。親切に世話を引き受けてくれるジャーリー夫人の元を、老人と離れ離れにならないように、黙って立ち去らざるをえないネルの決断は、トレント老人の空回りする愛情を一層引き立たせる。

物語が進むに連れて、沈黙が空回りする愛情を引き立たせるのは、トレント老人の側でも同じである。死の間際まで喧騒のなかに生きるクイルプとは異なり、トレント老人は物語終盤に入るとますます沈黙を守るようになる。

このとき、本来であればトレント老人は、賭博から抜け出してネルへの真の愛情を示して言葉にするという決断をもっと早い段階でしなければならなかったはずだ。しかし、トレント老人は旅の終着点ぎりぎりまで賭博への妄執を捨てきれない。作品の末尾では、トレント老人が改心して、ネルのことを気遣う描写が見られるが、あまりにも遅すぎた改心であったと言わざるを得ない。それまでの沈黙が、結果としてネルを死に追いやってしまう。つまり、発する言葉だけでなく、トレント老人の沈黙も、ネルの自覚は別にして、暴力行為になっている。

4. おわりに

そもそもトレント老人の改心自体が、沈黙の裡に覆われてしまっている。ネルが死んでから彼は頑なに口をつぐみ、その死を認めようとしめない。やがてネルの死を認識した後は、正気を失ってしまう。トレント老人はネルへの愛情という一点において感情が突出しているのであり、それ以外の感情はほとんど作中に描かれない。そもそもネルへの愛情についても、その激しさの程度が暴力となって言葉に、あるいは沈黙に表現されているが、なぜネルにそこまでの愛情を抱くようになったかという根源の部分に至っては、弟である独身紳士 (the bachelor) の昔話によって第 69 章でようやくわずかに触れられるのみであり、本人の口から説明されることはない。ここではっきりと言えることは、トレント老人の心理構造が明確に示されないからこそ、ネルへの愛情の強さばかりが浮き彫りになり、その言葉がクイルプの発する中身のない台詞とは違った色合いを帯びているということだ。

そんな老人の姿を端的に表すのが、第 55 章においてネルをわずかながらも気遣うようになる老人の心理描写に現れている。旅の果てにたどり着いた村の墓地で花を植える仕事に精を出すネルに死が迫っていると、トレント老人が漠然と気づく場面である。

There are chords in the human heart – strange, varying strings – which are only struck by accident; which will remain mute and senseless to appeals the most

passionate and earnest, and respond at last to the slightest touch. In the most insensible or childish minds, there is some train of reflection which art can seldom lead, or skill assist, but which will reveal itself, as great truths have done, by chance, and when the discoverer has the plainest and simplest end in view. (413)

これ以降トレント老人がネルを本当の意味で気遣うようになることから、この引用は、トレント老人の改心について触れたくだりであるはずである。しかし、ネルに対するトレント老人の改心の情が具体的に述べられずに全体として抽象的な描写に留まるこの引用から、そのような作者の意図を読み取るのは難しい。それよりも一般論として人間心理を語ることで、作者の意見表明の場として捉える方がこの一文を的確に理解できるであろう。どれだけ懸命に人間の「心の琴線」に触れようとしても、それはすぐには叶わない。むしろ偶然に頼るしかないとまで言い切る語り手は、まさにこの老人のような捉えがたい心理を描くことの難しさを率直に語る。

だが、「技巧」や「技術」ですらほとんど表現できない登場人物の胸の裡をどのように表現するかという点においては、人形であふれかえるとも評される『骨董屋』という作品のなかで、トレント老人こそ作者が最も力を入れた作中人物と言えるのではないか。純粹であったはずの孫娘への愛情が、こともあろうに彼女を死へと向かわせる暴力へとすり替わってしまう微細な心理を、ディケンズは静かに旅をする老人に託して描いた。ともすれば、感傷的な趣が強すぎるなどの理由で、瑕ばかりが目立たない作品である。だが、トレント老人の言葉に、そして沈黙に込められた暴力性は、そのような批判の矛先が向けられた読者の感傷的な気分を訴えるだけの大げさな表現方法とは異なるやり方で示されている⁸。静かな言動のなかにも、暴力的であるとさえ言えるほどの激しい感情を描き出す試みは、若き作者ディケンズにとって、ひとつの挑戦だったのではないだろうか。その表現における試みこそが、『骨董屋』に単純な観念上の対立構造だけでは捉えきれない奥行きを持たせているのだ。

註

本稿は日本英語表現学会第46回全国大会(大阪電気通信大学:2017年6月25日)における口頭発表を元に、加筆・修正を加えたものである。

1. 出版の経緯について、ジョン・フォースター(John Forster)は“the capability of the subject for more extended treatment than he had at first proposed to give to it pressed itself upon him”(179)と述べており、物語を変更した理由が雑誌の売り上げという経済的な側面だけではないことを示唆している。
2. 『骨董屋』における都市と田舎の対立構図を指摘する論は他にも多数あり、たとえば、スティーヴン・マーカス(Steven Marcus)はネルの旅について過去を表象する田舎を目指した「田園詩」“idyll”(135)であると指摘する。またシュリッケはそのような二元論からさらに論を進める形で、都市の革新性と田舎の伝統、両方の性質を兼ね備えた人物としてスウィヴェラーを挙げて、その存在の重要性を説いている(“Embracing the New Spirit of the Age”, 1-35)。
3. 代表例としては、ハリー・ストーン(Harry Stone)がジョンソンのようにこの作品を寓話として捉えた上で、ネルを善、クイルプを悪の象徴として論じている(108-09)。
4. 語り手のハンフリー親方もネルをもっと気遣うようトレント老人を説得するとき、「彼の利己主義と思える態度に我慢ならず“roused by what I took to be his selfishness”(14)」と述べて、その身勝手な性格を読者に伝えている。ジェローム・H・バックリー(Jerome H. Buckley)はこのような場面から、老人の性格を“impercipient, selfish, self-deluded, and full of self-pity”(85)と分析しているが、作品全体にトレント老人が及ぼす効果については論じていない。
5. 『骨董屋』における見世物の要素については、ドーン・P・ケリー(Dawn P Kelly)がクイルプとパンチ劇の共通点について論じている(140)。また、A・E・ダイソン(A. E. Dyson)は、小説世界全体を骨董屋になぞらえた上で、登場人物たちをその商品に見立てている(22)。
6. 本論におけるトレント老人の「暴力性」とは、必ずしも身体的な暴力だけを指すものではない。トレント老人の行動によってネルが窮地に陥ってしまうという構図は、ネルの側に立ってみれば十分に暴力的な側面を持つ。そのため、そのようなトレント老人の行動を「暴力」、そのときの心理を「暴力的」と広義の意味で呼ぶことにする。
7. エイドリアン・ラポイント(Adriane Lapointe)は、トレント老人の同じ台詞に、作品世界における神の不在を読み取ってその重要性を指摘しているが(25)、そのときの老人の心理については深く考察していない。
8. 『骨董屋』の構成や強く感傷に訴えるディケンズ的手法については、多くの否定的な批評も存在する。なかでも、オルダス・ハクスリー(Aldous Huxley)は“it is distressing in its ineptitude and vulgar sentimentality”(55)と強い口調で酷評し

ている。

引用文献

- Andrews, Malcolm. "Introducing Master Humphrey." *The Dickensian* 67, 1971, pp.70-86.
- Buckley, Jerome H. "Little Nell's Curious Grandfather." *Dickens Studies Annual* 24, 1996, pp.81-91.
- Cordery, Gareth. "The Gambling Grandfather in *The Old Curiosity Shop*." *Literature and Psychology*, vol.33, no.1, 1987, pp.43-61.
- Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. Ed. Norman Page. Penguin, 1995.
- Dyson, A. E. *The Inimitable Dickens*. Macmillan, 1970.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Chapman & Hall, 1874.
- Hobsbaum, Philip. *A Reader's Guide to Charles Dickens*. Syracuse UP, 1998.
- Huxley, Aldous. *The Vulgarity in Literature*. Chatto and Windus, 1930.
- Jackson, Lisa Hartsell. "Little Nell's Nightmare: Sexual Awakening and Insomnia in Dickens's *The Old Curiosity Shop*." *Dickens Studies Annual* 39, 2008, pp.43-58.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. Vol. 1. Victor, 1953.
- Kelly, Dawn P. "Image and Effigy: The Illustrations to *The Old Curiosity Shop*." *Imagination on a Long Rein: English Literature Illustrated*, edited by Joachim Moller. Jonas, 1988, pp.136-47.
- LaPointe, Adriane. "Little Nell Once More: Absent Fathers in *The Old Curiosity Shop*." *Dickens Studies Annual* 18, 1989, pp.19-38.
- Marcus, Steven. *From Pickwick to Dombey*. Chatto & Windus, 1965.
- Schlicke, Paul. "Embracing the New Spirit of the Age: Dickens and the Evolution of *The Old Curiosity Shop*." *Dickens Studies Annual* 32, 2002, pp.1-35.
- . *Dickens and Popular Entertainment*. Allen, 1985.
- Stone, Harry. *Dickens and the Invisible World*. The Macmillan. 1979.